［ＳＴＥＰ１７］　～札を相手より早く取るために～

〔Ｉ〕　『札を取る構えについて』

札を取る構えは、詠まれる前に頭を持ち札の上段より前に出さないこと、手を競技線より前に出さないことを守ればルール上はどうでもいいわけである。実際、体格などによって個人差というものが出てしまうので千差万別である。要は自分さえ取りやすければよいのである。多くの人の構えを見て研究してみるのがいいのだが、ここでは一般的と思われる構えを紹介しておこう。頭の中で「自分の構えはこのような感じかな」とイメージを組み立てながら、読んでいただきたい。

まず、札を実際に敵陣と自陣の各段の左右両端競技線いっぱいに一枚ずつ計十二枚並べてみる。次に自陣の手前十センチメートルくらいのところに膝がくるように両端の札から等距離に正座をする（以下、右手で札を取る立場で説明するので、左手で取る人は左右逆に読みかえてほしい）。正座をしたら、左と右の膝を拳（こぶし）一つから二つ分くらい開き、右膝を約十センチメートル引く。次に左手を自陣左下段左端の札の一～二センチメートル手前に札の短い方の辺と平行になるように置く。右手は競技線ギリギリからチョット手前程に、卵を軽く握るような感じで、自然に無理な力を入れずに、指先が畳みにつくように置く。そして、膝に身体の重さが少々かかるようにやや腰を浮かし、前傾姿勢をつくる（この時、頭が自陣の持ち札の上段より前に出ないように注意する）。大体、このような感じで構えるが、体格などは違うので左手の位置や膝をの位置は、以下のことを行ないながら調整してほしい。

今述べた構えから、敵陣の右下段（こちらから見ると左）、左下段、そして自陣の右下段、左下段の各札にまっすぐに手を出してみよう。当然、手だけを伸ばすのではなく、身体の重心を移動させながらである。この時、どこに対しても同様に楽に自然に手の出せる構えになるように手の位置・身体の位置（膝の位置・腰の高さなど）を工夫しよう。構えは体調によって変わることもある。しっくりこなくても、初めはあまり気にせず、自分に適した構えを練習の中で見つけだすようにしよう。

〔Ⅱ〕　『札の取り方について』

札の取り方については、直接札に触れる方法と札押しという方法があることを既に説明した。このどちらの方法で取るにしても有効なのが「払い手」という取り方である。札が

詠まれる瞬間に手を置いている場所から、目的の札の方向へ最短の進路で手を動かし、目的の札を払い飛ばすのが払い手である。この場合、出札に触れられれば最良であるが、多少ズレが生じても、競技線に対して出札より手前の札から払えたならば札押しで取ることができる。最も多用されているのがこの「払い手」である。札を払う瞬間、最大限のスピードを出せるようにすることと、払う直前に決まりを聞き別けて、異なる札であれば払わずに手を浮かせるようにするのが、「払い手」の練習のポイントとなる。自陣・敵陣の各段の両端に札を並べて練習してもらいたい。左右どちらもうまく払えるようになるまで練習することが肝要である。この時の注意点を二点述べておく。一点は、最初から払う札を見ていないことである。実際、何の札が詠まれるのかはわからないからである。敵陣中央くらいにボーッと視線を置き、払う目標が定まった瞬間に視線をそこに集中させ札を払うよう練習しよう。もう一点は、払う時に「あそび（余裕）」のない払いをしないことである。たとえば、ある札を取りに行った時、身体が伸び切って重心は完全にそちらに流れて、しかも腕も手も伸び切って倒れる寸前などという払いをしていると、もしも、その札が違った場合に、お手付をしやすいし、そこから別の札を取りに行こうとしても取りに行けなくなってしまうからである。払う寸前で聞き別けて、違う場合は他の札へ身体と手がスムースに動けるくらいの余裕は残しておかなければならない。この「あそび（余裕）」が札を払うタイミングを取るのに役立つ。要は、払う瞬間までは伸び切らないようにすることである。指先しかり、手首しかり、肘しかり、腰しかりである。どこか一箇所に余裕があることで、お手付を避けることができるのである。以上の点を注意して、満足のいくまで練習してほしい。

さて、札の取り方には、「払い手」以外にも「押え手」「突き手」「囲い手」などがあるので、簡単に説明しておこう。

「押え手」というのは、出札を上から押えて取る方法である。出札に直接さわるので、押え手で札押しということはまずない。この際、注意することは、高い位置から押えに行くと、札を押えるまでの時間がかかり、相手に下にもぐられて札を取られてしまうことである。押えて取るならば、できるだけ低い位置から手を持っていき、相手に下からもぐりこまれないように押えるべきである。

次に「突き手」であるが、これは出札にまっすぐに手を出し、指先で札を突き上げて取る取り方である。上段の中央に置いてある札などを取る時に有効である。

「囲い手」というのは、大山札などの決まり字までが長い札を取る時に使う。札に触れ

ないように、なおかつ、相手の指先が札に触れることができないように出札を囲って取るわけである。もちろん、違う札が詠まれた場合には、誤って札に触れないように手をどける。

以上が主な取り方である。他にも「渡り手」（同陣内にとも札が左右等に別れて置いてある場合、両方を素早く払う取り方）とか「戻り手」（敵陣のとも札を取りに行って、違った場合自陣に戻って取る取り方）などの名称があるが、これらは「払い手」「押え手」などのバリエーションと考えてよいだろう。いずれの取り方も、上達するには練習あるのみである。実際に札を並べて練習してみてほしい。

札　音　（９）

～微妙な音を聞きわけよう～

「一字決まりの札を半音で取れたら」「三字決まりの札を二字で取れたら」と考えるのは競技かるたを競技する多くの人の願望であろう。決まり字というものがあるから所詮そんなことは夢だなどとあきらめずに聞きわけられるよう努力してみてはどうだろうか。世の中には、「す」「さ」「せ」のＳの半音の違いがわかるという人もいるのである。聞きわけようと神経を集中すればわかるようになるかもしれない。また、「あきの」と「あきか」は「き」を詠む時のトーンの違いで二音めで区別することが可能であるという人もいるし、「おおえ」の「オー」は、「おほけ」と「あふこ」の「オー」とは違うので検討がつくという人もいる。詠み手によっても、こうしてことが出やすい人と出にくい人がいるが、詠み手の癖を知ることは決して悪いことではない。これを糸口として聞きわけられるよう努力する価値はあると思う。同じ三音めを聞くのにも二音めの感じからこちらの札が出るだろうという根拠を持っているほうが有利なことはいうまでもない。「もしも、百枚の札すべてについて、こうした特徴を掴むことができたら…。」まさに夢である。夢を実現する選手はあらわれないものであろうか。

札　音